

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	『竹取物語』帝が文を焼く行為の意味：教室で読む〈伝統的な言語文化〉のあやうさ
Author(s)	安道, 百合子
Citation	国文学攷, 254 : 27 - 41
Issue Date	2023-06-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054552">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054552</a>
Right	本誌に掲載された論文等の著作権は、著者に帰属します。
Relation	



# 『竹取物語』帝が文を焼く行為の意味

— 教室で読む〈伝統的な言語文化〉のあやうさ —

安 道 百合子

はじめに

『竹取物語』は、学校教育において、古典文学の定番教材である。小・中・高いずれの校種の教科書にも掲載されており、小学校教科書では、はじめて古典に出会う際に「「かぐや姫」のお話として知られている」ことから、ことさらに親しみを持つる作品と位置付けているようだ。『竹取物語』は、初期物語特有の伝奇性と、人間存在の本質を語る文学性の両方の魅力を語るのにも適した教材と言ってよいだろう。しかし、その一方で、その読み、現代的な解釈が最も当然の顔をして混じることはないだろうか。『竹取物語』の最末部、帝が富士山頂にて文を焼く場面を例に、考えてみたい。

きっかけは、角川文庫の『ビギナーズクラシックス日本の古典竹取物語（全）』の解説である。傍線は引用者が付したものである。

さて、帝は、不死の薬と手紙を焼き捨てることによって、姫へ

の未練を断ち切った。明日からは、心機一転、最高権力者として、ふたたび地上界に君臨することだろう。

けれども、かぐや姫を失うことによって、権力の限界と愛の無常を思い知らされた今、帝はもとの帝ではない。人の道においても最高の経験を生かして、よりすぐれた帝王の道を生きるにちがいない。：〈中略〉：ちなみに、帝が不死の薬を焼き捨てさせるあたりは、いかにも日本人的ないさぎよさを感じさせる。古代中国の帝王が、不老不死の薬を求めて、探検隊を派遣したのとは大違いだ。(武田友宏氏 2001)<sup>(註1)</sup>

「いかにも日本人的」とまで言われると、やや首をかしげてしまう。けれども、この本の読者であるビギナーは、なるほど、と納得するかもしれない。古典は、長い歳月にわたる読みの積み重ねが想定される。解釈は時代によって揺れが生じることもある。原文で読む必要があるかと問われることもある昨今だからこそ、古典を読む意義

についても考察を及ぼしたい。

## 問題の所在

古典文学作品の多くは、複数の伝本を持ち、その伝本の性質によって系統分類され、系統の異なる本文を校合した結果、良質な本文を整理する。教科書に採録される場合も、基本的には同様の操作が行われる。『竹取物語』伝本は、通行本系・古本系の二系に分けられ、現行注釈書の多くは、いわゆる流布本系統の祖とされる古活字十行本（慶長頃刊）を底本にする。古本系の写本も、完本が少ないうえに、室町期をさかのぼることはない。私たちが読んでいる『竹取物語』が、平安初期にあらわれた原態をとどめているのかどうか、確証は持てないが、『源氏』や『宇津保』の言及などから、現在読んでいる物語本文と大きく異ならない『竹取物語』が読まれていたことが推測されるというのが実態に即した理解である。

さて、当該部分の本文を角川ソフィア文庫本で示すと以下のとおりである。

大臣・上達部を召して、「いづれの山か天に近き」と問はせたまふに、ある人奏す、「駿河の国にあるなる山なむ、この都も近く、天も近く侍る」と奏す。これを聞かせ給ひて、

逢ふことも涙に浮かぶわが身には死なぬ薬も何にかはせむ  
A かの奉る不死の薬に、また壺具して、御使に賜はず。勅使には、

調石笠といふ人を召して、駿河の国にあなる山の頂に持てつぐべき由、仰せ給ふ。嶺にてすべきやう教へさせ給ふ。B 御文、不死の薬の壺並べて、火をつけて燃やすべき由、仰せ給ふ。その由承りて、土<sup>ち</sup>もあまた具して山へ登りけるよりなむ、その山を「富士の山」とは名づけける。その煙、いまだ雲の中へ立ち昇るとぞ、言ひ伝へたる。

傍線A部分は、注釈書によっては校訂を加えている。<sup>(注)</sup>主たる校訂本文を示す。

a 1 かの奉る不死の薬に、又、壺具して

(雨海1985・堀内1997・上坂1999・室伏2001・関根高橋2003)

a 2 かの奉る不死の薬に、文、壺具して(大井田2012)

a 3 かの奉る不死の薬、御文、壺具して(野口1979)

a 4 かの奉る不死の薬壺に文具して(片桐1994)<sup>(注)</sup>

そもそも、「かの奉る」の根拠となる記述は、この場面の直前に記されていた。

中将、人々引き具して、帰り参りて、かぐや姫をえ戦ひとめずなりぬる、こまごまと奏す。薬の壺に御文添へて参らす。拡げて御覽して、いとあはれがらせ給ひて、物もきこしめさず、御遊びどもなかりけり。

さらに前をたどると、かぐや姫は昇天に際して、帝に宛てて「御文」を書いていられる。手紙文は、「とて」と直接引用のかたちで記され、

歌「今はとて天の羽衣着る折ぞ君をあはれと思ひ出でける」が一首

記されたあと」とて、壺の薬添へて頭中將呼び寄せて奉らす」とある。

従って帝が「拡げて御覧じ」て、深く心を動かされた「御文」とはかぐや姫の手紙文と和歌を指していると考えられる。また、ここまでの本文では、帝に渡す不死の薬は、「薬の壺」「壺の薬」とあり、既に壺に入ったものとして存在しているように記述されている。以上を踏まえて、A部を読むと、「また壺具して」の本文にはやや不審がある。ところが、異文はさほど多くないので、多くは、底本のままa1として本文校訂は行わず「又」は「文」の誤りか」と注記（堀内）したり、「一度壺から出した薬を再度入れたので、又とした」（室伏）と解説する。一方、異文を根拠に「文」に校訂するのがa2。底本「にまた」を「御文」とするのがa3。やや大胆に校訂をするa4は「不死の薬は当初から壺に入っていたのであるから、本文の混乱は明らか」とし「又」を「文」の誤写としたりうえで、補入の傍書であった「壺」が誤った場所に混入したと想定した。

いずれにしても、その後、山頂ですべきやうを教えるくだりにいたって、傍線部Bにあるように、燃やしたのが「御文」と「不死の薬」であることが明らかになる。この部分はほぼ異同がない。しかし、燃やした「御文」が誰の手紙を指すのかについては、次のb1・b2に解釈が別れる。

#### b1 かぐや姫の手紙

#### b2 帝の手紙

このことは、燃やすという行為の意味づけに関わって考えるとされる。ただし、かぐや姫の手紙のほうは、作品本文に「御文」と二度にわたって記されるが、帝は歌が一首記されるだけである。b2説を取る場合は、この歌を指すか、歌を含めて書いた文があるかと想定しなければならない。

現代語訳だけを見るとB部分の「御文」は特に誰のかを明示せず「お手紙」とするものも多い。室伏氏も「お手紙と不死の薬の壺を並べて」と訳すが、解説において、手紙を「かぐや姫の手紙」と明示したうえで、次のように煙の意味に言及する。

「その煙」とは言うまでもなく、かぐや姫が天皇に残した手紙と不死の薬を富士山頂で焼いた煙であり、焼いた理由は『竹取物語』の末尾を飾る天皇の歌、「逢ふこともへ以下略」にこめられた人間天皇の痛切な思いの表明によって明確であろう。…へ中略…：現実には絶望的に遠い月世界に、最も近い距離を選び、「思ひ（火）」の煙を焚いて交信を果たそうとするばかりか、「その煙、いまだ雲の中へ立ち昇る」の表現は、煙の中に故人の傍の顕現を見る反魂香の思想さえ読み解く自由を与えてくれよう。

天に近い山で焼かせたということに「思ひ」と「交信」の意図を読み取った点では、「いさぎよさ」とは逆に姫が昇天してもなお絶えぬ帝の強い思慕を読み取っていると見えよう。

さて、現行の注釈書の多くは、両説を紹介したうえで帝の手紙説をとるか、手紙を焼く意味について解説を加えるものが多い。以下、近年の主要注釈書の関連注記を出版年順にあげる。

○上坂信男全訳注 『竹取物語』講談社学術文庫 1978

現代語訳・例の、かぐや姫がお届け申した不死の薬に、この歌（直前の帝詠をさす―引用者注）を添え、さらに壺をもいっしょに御使いの者にお渡しになる。

○野口元大校注 『竹取物語』新潮社 新潮日本古典集成 1979

御文…かぐや姫から帝への御文、帝の姫への御文、と両説あるが、天に向って永遠に立ち昇る煙となるのであるから、帝の尽きぬ思ひ（火）の煙と解したい。

○雨海博洋訳注 『現代語訳対照 竹取物語』旺文社文庫 1989

「御文」はかぐや姫の手紙か帝の手紙か、二通り考えられる。「か」奉る不死の薬に、又、壺具して」とあるので、かぐや姫が奉った「不死の薬の壺」に、帝の御文を添えて帝の切なる慕情を煙として、月へ届けとばかり焼かせたものと考ええる。

○吉岡曠 『現代語訳 竹取物語・伊勢物語』現代語訳学燈文庫 1990

訳・歌を書いたお手紙のはいつている壺と、不死の薬のはいつている壺とを並べて

○堀内秀晃校注 『竹取物語 伊勢物語』岩波書店 新日本古典文

学大系 1997

御文…「死なぬくすりも」の歌を含む帝の手紙。薬を焼くわけを天界に訴えた行為。

○関根賢司・高橋亨編 『新編竹取物語』おうふう 2003

脚注・御文 文（新井本）。一説、かぐや姫の手紙。「源氏が亡くなった紫の上の文を」御前にて破らせ給ふ。…みな焼かせ給（源氏、幻）。一説、帝の手紙（返歌）。平安期に帝の宣命を焼く例としては、十陵八墓への荷前の使や、春日の祭の例がある。

○大井田晴彦 『竹取物語 現代語訳対照・索引付』笠間書院 2012

御文―かぐや姫からの手紙を処分するという見方もあるが、帝のかぐや姫への手紙と解するべきである。手紙を燃やし、煙を立ち上らせることで、遥か月の世界にいるかぐや姫に想いを伝えるのである。十陵八墓への荷前の使や、春日祭の使が、宣命を焼くのに通ずる行為（益田勝実）。

概観すると、帝の歌をもって帝の手紙と解し、それを煙に立ち昇らせることで、慕情ないしは訴えを届ける象徴とみなしたというのが定説と言ってよいようである。

### 帝の歌は返歌か

そもそも、帝は、「火をつけて燃やすべきよし」を命じている。明確な目的を持って、具体的な方法を示したと考えるべきであろう。

帝詠の「何にかはせむ」は受け取りを拒否する意志である。であれば、目の前から消したいというよりは、きちんと相手に返し届けること、それがこの物語を「その煙、いまだ雲の中へ立ち昇とぞいひつたへたる」という一文で結んだ所以であると思う。不死の薬が、かぐや姫からもたらされた物である以上、それを焼くというのは、天界に「返す」という意志を持って、その「返却」が「煙」という目に見える事象によって確認できていることが重要な意味を持つ。

これについて、若干研究史を整理しておく、近年の注釈書が引用する益田説は、「天皇」が焼かせた意味を重く見、「宣命を陵墓の前で燃やすきたりを応用したもの」と説いた。煙とすることがこの世とこの世の外とのコミュニケーションの方法であるとしたのである。<sup>(注1)</sup>これに加えて、「富士山」の頂上、という場所を重視して、山岳信仰を読み取る指摘もある。<sup>(注2)</sup>

ここでは深入りしないが、益田説への反論として、地上の人間界と天上の神仙界を互いに排除しあう関係とみなし、天皇制で統括された地上の論理を自覚させる意図を読み解く立場もある。<sup>(注3)</sup>しかし、物語から看取できる思想は、必ずしも、仏教、道教と一つの思想で一貫したものではない。上原作和氏が述べたように「神と仏や日常の禁忌を必要に応じて使い分ける「日本的」宗教構造があることを前提とし」<sup>(注4)</sup>て、さまざまな思想が入り混じっているものとゆるやかにとらえておきたい。

では帝の歌はどのような形で書かれたのであろうか。「文」と言えるのだろうか。注釈書類においても、「歌を含む手紙」というような、ぼんやりとした解説が多い。物語は、帝の歌がどこに書かれたかに言及せず、またこれを「文」とは言っていないからである。

まずは帝の歌が、かぐや姫の歌への返歌になっているかどうかを考えた。贈答になるかどうかという問題である。

和歌を伝えているという点では、現行の『竹取物語』(伝本に先行して『海道記』と『風葉和歌集』が存在する。『海道記』は貞応二(1223)年成立、鶯の卵から生まれるという設定が『竹取物語』と大きく異なるものの、中世竹取説話のなかでは、「不死の薬」を記していることが共通する。また、現行本とはほぼ同じ二首の和歌を末尾に記している。

鶯姫、天に昇りける時、帝の御契さすがに覚えて、不死の薬に歌を書きて、具して留めおきたり。その歌にいふ。

今はとて天の羽衣きる時ぞ君をあはれと思ひいでぬる

帝、これを御覧じて、忘れ形見は見るも恨めしとて、怨恚に堪

へず、青鳥を飛ばして雁札を書きそへて、薬を返し給へり。そ

の返歌にいふ、

逢ふことの涙にうかぶが身には死なぬ薬もなにかはせむ

使節、智計を廻して、天に近き所はこの山に如かじとて、富士

の山に登りて焼き上げければ、葉も書も、煙にむすぼはれて空  
にさがりけり。これより、この嶺に恋の煙を立てたり。よりにて  
この山をば不死の峰といへり。しかして郡の名につきて富士と  
書くにや。 (『海道記』)

ここでは鶯姫の手紙は歌だけが記されているもので、それを見た  
帝の気持ちと反応が端的に記されている。「怨恋に堪えず」、「その  
返歌」として帝詠が記され、「葉」と、「書」すなわち歌が富士山の  
頂上で焼き上げられたのである。ちなみに、竹取説話を引く中世古  
今注のなかには、不死の葉が描かれずとも、帝の「思ひ」が富士の  
煙となる叙述が見られるものがある。『古今和歌集序聞書 三流抄』  
には、「煙絶えず。是により、富士の煙を恋によむなり。」とあり『古  
今集為家抄』には「思ひ、火となりて鏡につきて燃えけり。この火、  
すべて消えず。これを見奉りて、公卿僉議して、本所、駿河の国富  
士の峯に送り置く。この火、煙となるといへり。」とある。次に、『風  
葉和歌集』離別部の二首を引く。

天の迎ありてのぼり侍りけるに、みかどにふしのく  
すりたてまつるとて

たけとりのかぐやひめ

五六九今はとてあまのは衣きるをりぞ君を哀と思ひ出でける

御かへし

五七〇あふことの涙にうかぶ我が身にはしなぬくすりもなにに

かはせむ

とてふしのくすりもこの御うたにぐして、そら近きを  
えらび、ふじの山にてやかさせ給へりけるとなむ

(新編国歌大観 丹鶴叢書底本1891刊)

詞書は贈答歌としての理解を示し、左注によれば帝の歌を添えて  
焼いている。

ちなみに、古本系の本文のうち、新井本は、現存する竹取物語の  
なかでもっとも長く、帝の歌の前に「かぐや姫の歌の返し、かかせ  
給ふ。」という本文がある。また、歌の後に続く本文もA部分「か  
のたてまつれる不死の葉の壺添へて」、B部分「文、不死の葉の壺  
をならべて、火をつけて燃やすべきよしを」とあって、通行本系よ  
りも、筋の通った読みやすい本文になっている。古本系とはいえ室  
町をさかのぼらない本文は後人に改作された疑いが捨てきれない側  
面もあり、必ずしも良本と断じ難いことを頭に入れておく必要はあ  
ろうが、享受のされ方の一と価値づけることは可能であろう。

以上のように、鎌倉初期に、『竹取物語』を参照し引用したと考  
えられる二書の記述からは、少なくとも物語の末尾が現行のもの  
と大きく異なるない『竹取』が読まれていたことが想定され、なおか  
つ、帝の歌は「返歌」と認識されていたことが確認できる。さらに  
加えるならば、中世の竹取説話の多くが古今注に見られることから、  
中世における『古今集』の理解として、この返歌を「富士山」で焼

いたことの意味、「思ひ」を「煙」にしてさらに焚き上げたことの意味が重要だったということが確認できよう。『古今集(仮名序)』富士の煙によそへて人を恋ひ」と述べたその文言の由来を確認しているわけである。

では、歌として二首を並べたときに、帝の歌は果たしてかぐや姫の歌に対する返歌になっているのだろうか。贈答歌として表現の照応があるかと言え、言葉じたいの照応はない。

室城秀之氏は「贈答歌ではないと思う」と述べ、「心異にな」ったかぐや姫と帝との間には、もはや贈答歌は成立しえないだろう。「この帝の歌は、かぐや姫から不死の薬を贈られながらも、それを飲むことなく死んでゆくべき地上の存在としての孤独を歌う独詠歌であった」とする読みを提示した。また、鈴木日出男氏は、言葉じたいの照応がないことを指摘しつつも、『死なぬ薬も何にかはせむ』という相手への反発のしかたに、返歌の作法を忘れてはいない」とし、「己が心情を主情的におし出した」「いわば不在者への返歌、贈答歌の片われともいうべき歌」とした。両説は相反するようであるが、実のところは、帝から姫にむけた強い「思い」を読み取り、「返歌」としての意識を汲み取っているといえよう。

確かに帝の歌はかぐや姫の歌と照応する言葉はない。帝は、姫から贈られた、はじめての、そして最後の、「君をあはれと思」という実に率直な愛情の告白にはげしく感動したはずである。しかしもし

う二度と逢うことはかなわない。以下の野口氏の論に尽きると思つ。

これほどに純粋な愛までが拒まれざるをえないのが人間であるなら、人間としての永遠の生などといった何の意味があるのか。いっそ尽きせぬ思いに焦がれて死ぬのが人間にふさわしい。／こうして、永生を庶幾する伝承説話の土俗的思考を積極的に否定することに、帝の悲劇は完成され、真の人間性の象徴となりえたのであった。人間に最も本具的な欲求・願望を自らの決意によって拒否しなければならないことの悲しみ、これが帝の歌に流れる叙情性の本質である。(新潮古典集成解説)

氏はさらに、歌表現としては呼応しないという点を逆説的に評価し、「作者はことさらに二人の贈答歌の真剣なちぐはぐさを示すことによって、遂に結ばれることのありえない運命を暗示しようとしているのであろう」と述べた。加えて、近年、齊藤みか氏は、かぐや姫の「今」「をり」という言葉と帝の「死なぬ薬」という永遠の命を表す言葉に着目し、「死なぬ薬」を「何にかはせん」と帝が否定することにより、かぐや姫と帝の両者が共に今この瞬間の重要性に着目している」と贈答歌としての構造の共通点に言及した。

ここでさらに加えるならば、やはり富士の煙があがり続けていることが重要なのである。帝の歌が煙として上がり続けているということは、人間という有限の命を持つ存在でありつつ、「思ひ」が上がり続けるという思念の世界の永遠性を象徴していると考えるべき



であろう。

では、その歌はどのように書かれたのであろう。物語には「文」の言葉はない。それについては、『大和物語』第一段「亭子の院」が参考になるのではないだろうか。

亭子の帝、いまはおりゐさせたまひなむとするころ、弘徽殿の壁に、伊勢の御の書きつけける。

わかるれどあひも惜しまぬももしきを見ざらむことのなにか悲しき

とありければ、帝、御覽じて、そのかたはらに書きつけさせたまうける。

身ひとつにあらぬばかりをおしなべてゆきめぐりてもなどか見ざらむ

となむありける。(高橋正治校注訳 新編日本古典文学全集本)  
思うに、帝は、届けられたかぐや姫の御文の、彼女の和歌のかたわらに、歌を書きつけたのではなからうか。それを富士山頂で燃やしたのである。彼女の歌の横に書きつけることで、返歌だという意味を持たせ、この手紙もともに焼いたのではなからうか。そうであれば、帝の歌が書かれていながら、「文」を書いたと敢えて言う必要がなかったのであり、さらには、燃やした「御文」は帝の返歌が書きつけられたかぐや姫の手紙ということになる。現代語訳では、「お手紙と葉壺」としか訳さないにしても、実際には、帝の返歌を

空に焚き上げたということになるのである。

以上をまとめると、現存本文が成立時と大きく変わらないこの想定のもとで、この場面を解釈するならば、帝はかぐや姫の手紙と不死の薬を不要として天界に返したのであり、またその理由として、自分の尽きぬ「思ひ」を天界に届けようとしたと考えるべきであろう。昇天したかぐや姫との贈答の意識が読み取れる以上、「未練を断ち切る」とか「いさぎよい」というのは、あたらないのである。

### 『源氏物語』の『竹取』享受と引用態度

周知のように、『竹取物語』を物語の祖と明確に位置付けたのは『源氏物語』である。蓬生巻で、零落した末摘花が「時々のみまめぐりもの」としたのが「かぐや姫の物語の絵に描きたる」であった。絵合巻では、梅壺女御方と弘徽殿女御方とに分かれて物語絵の優劣を競うに際し、最初に、「物語の出で来はじめの親なる竹取の翁」に「宇津保の俊蔭」を合わせている。ここには、「かぐや姫のこの世の濁りにも穢れず、はるかに思ひのぼれる契りたかく」とか「ももしきのかしこき御光には並はず」との叙述があり、地上を濁った世界ととらえる世界観や、かぐや姫が帝と結婚せずに昇天するという現行『竹取物語』の主たるテーマが既にあったことが想定される。

しかし、『竹取物語』最末尾の帝が文を焼く場面を、より具体的に引用しつつ深化させたのは、幻巻の次の場面であろう。

落ちとまりてかたはなるべき人の御文ども、「破れば惜し」と思されけるにや、すこしづつ残したまへりけるを、ものついでに御覽じつけて、破らせたまひけるもある中に、かの御手なるほひ、所どころより奉りたまひけるもある中に、かの御手なるは、ことに結びあはせてぞありける。みづからしおきたまひけることなれど、久しうなりにける世のことと思すに、ただ今のやうなる墨つきなど、げに千年の形見にしつべかりけるを、見ずなりぬべきよと思せば、かひなくて、疎からぬ人々二三人ばかり、御前にて破らせたまふ。

いと、かからぬほどのことにてだに、過ぎにし人の跡と見るはあはれなるを、ましていとどかきくらし、それとも見分かれぬまで降りおつる御涙の水茎に流れそふを、人もあまり心弱しと見たてまつるべきがかたはらいたうはしたなければ、おしやりたまひて

死出の山越えにし人をしたふとて跡を見つつもなほまどふ  
かな

さぶらふ人々も、まほにはえひきひろげねど、それとほのぼの見ゆるに、心まどひどもおろかならず。この世ながら遠からぬ御別れのほどを、いみじと思しけるままに書いたまへる言の葉、げにそのをりよりもせきあへぬ悲しさやらん方なし。いとうたて、いま一際の御心まどひも、女々しく人わるくなりぬべけれ

ば、よくも見たまはで、こまやかに書きたまへるかたはらに、  
かきつめて見るもかひなし藻塩草おなじ雲居の煙とをなれ  
と書きつけて、みな焼かせたまひつ。

(新日本古典文学全集 幻巻④546～548)

紫の上が亡くなったのは八月十四日、まさにかぐや姫の昇天になぞらえるように源氏の最愛の女君は翌日茶毘に付された(御法巻)。続く幻巻は光源氏が一年をかけて悲しみを癒し出家に向けて心を整理していく過程を描く。引用した場面は、八月に一周忌の法要を終え、九月の重陽の節句、神無月の時雨、霜月の五節とひとつきひとつきを辿るように経ていよいよ年の瀬に文の処分をする場面である。残しては見苦しい文を少しずつ処分してきたなかでも、須磨に退去していた時の手紙は格別の思い入れがあり、なかでも「かの御手」紫の上の筆跡は取り分けて結ってあった。「千年の形見」ともなりそうなそれを、出家したら、見る事もなかるうと「かひなくて」気心のしれた女房たちと御前で破らせるのである。

心を決めて破り捨てようとする源氏であるが動揺が抑えきれない。須磨退去時の手紙は、同じ世にいながらの別れでありながら尋常ならざる悲しみであったその記憶を呼びおこし、今、それとは比すことのできない幽冥境を異にした別れを経験し、しかもすでに一年経っているにも関わらず、一向に悲しみが癒えないという状況を再認識させたのであろう。源氏は、紫の上の文のかたはらに歌を書

きつけ、みな焼かせてしまったのである。

この場面が『竹取』を踏まえていることは、早くから指摘されており、新全集の頭注には次のようにある。

手紙を破り捨てたり焼き捨てたりするのは、紫の上とともに生きてきた三十年余の生活に於いて区切りをつけようとするからである。そのように故人への愛執を断ち切ろうとする源氏には、『竹取物語』の末尾、かぐや姫の置き土産の不老不死の薬や和歌をも焼かせてしまった帝の面影がある。そしてその帝の場合もこの源氏の場合も、愛執断念の意思の底には、天空への煙を思う点で、喪失の相手への限らない愛憐の情がうずいているといえよう。

河添房江氏は、この場面が『竹取物語』の影響と云ってすまずには、あまりなまでの構造上の緊密な対応関係が出そろうて、一から「いわゆる引物語の関係」と位置付けつつ、「光源氏の堪えがたい愛別離苦の思は、かぐや姫を喪失した翁や帝の悲嘆を主題的に揺曳させることでいっそう深甚の度をます。」と論じたうえで、『竹取物語』との偏差をふくむことに言及した。『源氏物語』により捉え返された〈竹取〉の像を確認しつつも、『源氏』が達成した『竹取』の変形のありようをたどろうとされたのである。<sup>(河添)</sup>

幻巻での文焼却の意義はその後も視点を変えて論じられている。天野紀代子氏は、この場面が源氏の屋敷の中で行なわれていること、

すなわち「天上界に最も近い山ではない」ことを重要視し「死者との断絶」を受け入れる光源氏を読んだ。<sup>(河添)</sup> また、勝亦志織氏は、「記憶」を鍵言葉として「文焼却は、源氏にとつての紫の上葬送の場面であったと捉えたい。源氏の中の紫の上の「記憶」を焼いたことになる」と、過去との決別を読み取る。<sup>(河添)</sup>

こうした『源氏』の引用方法を読み取ることに、逆接的ではあるが、『竹取』の帝が文を焼いた行為が、かぐや姫に向けた思慕を表象させたものであることがより明確になってくると言えよう。かぐや姫が帝に遺した手紙は、即時的・瞬間的なものでしかなく、帝との時間の共有はなかった。三年に及ぶ帝からの求愛の最期の瞬間に、はじめて見せた、きわめて人間的な「あはれ」の自覚を表明したものである。加えて、帝は、昇天のその瞬間すら共有していない。「おもひ（火）」を冷ます時間は与えられていないのである。不死の薬が何になろうと、強く反発し、その火を天上に向けて燃やすしかなかったのである。

さて、河添氏は、「源氏物語の内なる〈竹取〉引用」を示したうえで、中世源氏注における『竹取』軽視にも言及された。中世以降、源氏注においては、『竹取』の文学的達成を読み取るうとしていない、という。中世における竹取説話の広がりとも関連があるだろう。『今昔物語集』にある竹取説話などを読むと、何とも味気ない印象をうける。『竹取』末尾のかぐや姫と帝の人間らしい交流はかけらもない。

一方で、古今集注には竹取説話が多く記されているという事実がある。中世においては、『竹取』末尾はまさに『古今集』との関わりで「富士の煙」に象徴される「思ひ」を読み取ることが重視されたのではなからうか。

では、物語史において、手紙を焼く場面はどのように、受け継がれていくのだろうか。冒頭の問題意識に立ち返れば、手紙を焼くことが「未練を断ち切る」と意味づけられることは、現代では不自然ではなく、むしろ当然とする解釈はあり得ると思うのである。「煙」に象徴される交信の回路を認める古代的な発想は、どのあたりから消えていくのだろうか。あるいは、未練を断ち切るという意味合いの始発をどのあたりに認めたらよいであろう。

光源氏の文焼却の場面は、『竹取』の帝との共通項と相違点をあぶりだした。このあと『源氏物語』第三部に及ぶと、浮舟は、匂宮、薫との関係に悩んで、ついに我が身を消したいとまで思い詰める。そのとき、彼女は、「むつかしき反故など破りて」「灯台の火に焼き、水に投げ入れさせなごやうやう失ふ。見られて困る手紙を、破って、焼いたり水に入れたりして処分する。浮舟の心中を知らぬ侍従は、秘密の手紙をこっそりとおいて時折見るのが「あはれ」なのだ」と浮舟の行為を「情けなきこと」と嘆くが、このときの浮舟は、自分が死ぬことを企図しているわけであるから、まさに手紙の処分は過去との決別である。

堤中納言物語の一篇『はいずみ』では、もとの妻が家を出るまゝに「泣く泣く恥づかしげなるもの焼かせなどする」。これまで住んでいた家に、男が新しい妻を迎えることになり、手づから手紙など見られて困るものを処分する。手紙を焼くというとき、どこで焼くのか、誰が何の目的で焼くのか、さらには、焼いた痕跡が記されるかどうか、というところが大きな分岐点になるように思う。「思ひ」が「煙」として表象されている限りは、そこに思念があり、その行く末に思いを馳せる。煙が立ち昇る空間のない、例えば屋敷のなかで、煙の景が描かれないうとき、決別の意識を読み取ることができよう。

### 教科書のなかの『竹取物語』

これまで述べてきた『竹取物語』最末部の理解は、教科書に反映されているのだろうか。

はじめて子どもたちが「古典」にふれる小学校の教科書では、「かぐや姫」との関連にことさら言及する。

教育出版は、物語冒頭文の引用と現代語訳が記されたあと「これは、『竹取物語』です。日本で最も古い物語といわれ、今から千年ほど前に作られました。竹から生まれた小さな女の子が、美しいひめに成長し、やがて月に帰っていく「かぐやひめ」の物語として知られているお話です。」と解説する。挿絵には、円地文子訳絵本

の表紙がある。ちなみに、円地訳は「とぶくるまは、かぐやひめ  
のせ、おおくの うつくしいてんにんに まもられて、そらたかく  
きえさって いってしまいました」で終わる。東京書籍は「みなさ  
んは、「かぐやひめ」のお話を知っていますか。／「かぐやひめ」の  
お話は、今から千年以上も前に書かれた「竹取物語」という物語が  
もとになっています。」、光村図書は文学史を解説する文章のなかで  
「かぐや姫で知られる「竹取物語」は、日本で初めての物語とされ  
ていますが、作者は分かりません。」と言及する。つまり、小学校  
においては、「かぐや姫」のお話として既知であることが前提となっ  
て紹介されている。では、「かぐや姫」のお話と『竹取物語』とは  
どのようにに連接し、どのようにに連接しないのか。そもそも現代の子  
どもたちに「かぐや姫」は「知られ」ているのだろうか。

ここで、まず問題としておきたいのは、「かぐや姫」は低学年で  
読み聞かせされる昔話や神話ではないということである。竹から生  
まれる、とか天に飛翔するとか、部分的に共通するプロットを持つ  
昔話や民話はあるが、ここで「知られ」ていると想定されている総  
体としての「かぐや姫」のお話のルーツは、実は国定教科書で  
ある。<sup>(註)</sup>

日本では、明治三七（一九〇六）年から昭和二〇（一九四五）年にかけて、  
国が作る国定教科書が使われている。「かぐやひめ」は第四期から  
第六期にかけて採録されており、いずれも『竹取物語』をまとめ直

して小学生用に書き直したものである。その特徴は、齋藤氏による  
と、求婚譚が省略されていること、月の人と人間との対比・心の獲  
得や喪失について触れられないことに加えて、翁媪に対して「お二  
人のご恩はけっして忘れません」と言わせるなど、思想教育の側面  
も見えることである。

帝に関しては、第四・五期は登場せず、戦後の第六期に至って、  
比較的原典に忠実に取り上げられ、富士の煙の場面もある。そこで  
は、かぐや姫は「みかどへ、おわかれの手紙とふしのくすりをのこ  
しました」とあり、帝は「天にいちばんちかい山」を探させて手紙  
と不死の薬を一緒に燃やすのである。最後の一文は「ふしのくすり  
をやいたけむりが、山の上からいつまでもいつまでもたちのぼって  
いきました。それで、この山の名をふじの山というようになりまし  
た」というものである。かなり原典に近づいたものの、手紙はかぐ  
や姫のものであり、富士山の由来は不死の薬である。

ちなみに、現代の子どもたちが一般に知り得る「かぐや姫」がい  
かなるものかについては、出版流通している絵本を対象とした先行  
研究が複数ある。<sup>(註)</sup> 求婚譚とその延長にある帝との情交は大幅に省略  
される傾向にあり、月の人と人間との違いや、心の獲得や喪失といっ  
た竹取物語の主題に関わる部分には踏み込まない。すなわち、「か  
ぐや姫」は『竹取』の主題に連接しているとは言いがたいのである。

ところが、中学校教科書での採録状況を確認すると、こちらは、

逆に冒頭だけでなく、求婚譚の紹介があったり、末尾が引用されて解説されたりしている。小学校での「かぐやひめ」との相違点が意識的に選り取られており、結果として、文学作品としての価値や主題との関わりも意識されている。「御文、不死の薬の壺並べて」の原文を載せるのは光村図書だけであるが、教育出版・東京書籍・三省堂・学校図書の四書もあらずじを解説している。

ここでふたたび「御文」が、b1かぐや姫の手紙か、b2帝の手紙か、を確認してみたい。光村図書は、「御文」が誰の手紙をさすのかはあえて明示しないが、同じ出版社の『光村の国語 はじめて出会う古典作品集4』は「火をつけて燃やすべきよし仰せたまふ」に「帝は、かぐや姫がいよいよこの世に長く生きてもしかたないので、不死の薬など必要ないと考えている。」と帝の歌を意識した注を付す。教育出版・学校図書は、「かぐや姫の手紙」とする。東京書籍は「かぐや姫から渡された不死の薬も何にならうと歌に詠み、大勢の兵士たちを天に一番近い山に登らせて焼かせました」とあらずじを書いており、手紙には触れないが、帝の歌に言及している。そんななかで、三省堂のみが明確に「帝の歌」を御文とみなして、一緒に燃やすよう命じたことを明記している。これは中学教科書のなかで、際立った違いである。三省堂は、あらずじとして以下のような文章を載せる。

頭中将は、薬と手紙を帝に献上した。…〈中略〉…(帝は)歌

を詠んだ。「再び姫に会う望みも消え、悲しみの涙の海に浮かぶ私には、不死の薬などいっただいなんにならう！」この歌をこの山の頂上で不死の薬とともに燃やすように命じられた。

原文の歌も脚注のかたちで掲載されており、帝の気持ちは「！」を付して強い印象を持たせられている。帝の歌を焼くことで、昇天した姫に向かって訴えているような印象が生れる。

冒頭にあげたビギナーズクラシックスは、焼いた手紙を「かぐや姫の手紙」と解釈しており、そのことが帝のいさぎよさを読み取る大きな理由になったと考えられる。中学校の教室で、古代のしきたりにまで思いが及ばないにしても、帝の訴えや未練を読み取る方向は許容されてよい。定説のように、帝の「思ひ」が立ち昇るという煙の喩にたどり着くには、この手紙が帝の歌であることを明示することは極めて重要である。

### おわりに

『竹取物語』最末尾の帝が文を焼く場面は、「帝の歌」を焼いたことが重要な意味をもっている。帝の思い(おもひ・火)が富士山頂からいまま空に立ち昇っているのである。

すぐれた文学作品は、多くの読者を獲得し、多様な読みを許容し、それゆえに長い年月を通して残り続けたものであろう。それが古典と称される所以でもある。その意味でまさに『竹取物語』は古典で

ある。

しかしこの教材は、教室で読むには、多くの難しさを抱えてもいる。最古の物語文学という位置づけを提示されているが、私たちは江戸時代の版本に基づいて本文を読んでいる。「源氏物語」をはじめ、平安期の文学作品から、確かに『竹取』の影響を看取できるが、それは物語のごく一端にすぎない。また、一方で、中世には竹取説話と称される伝承がさまざまなバリエーションで存在している。「かぐや姫」というお話がよく知られているとされ、小学校ではそれを手がかりに冒頭文を読むが、「かぐや姫」の実態は物語の主題に深く入り込むことはない。

〈伝統的な言語文化〉という学習指導要領の枠組みのなかで、系統性を重視すると、千年前から現代にいたる作品じたいの伝承経路やその享受の様相を直線的に語りたい願望をつい持ちたくなるが、それはかなわない問題が多く含まれているのである。教室に多様な解釈が持ち込まれることじたいを否定するものではないが、そこに、近代以降の軌範や価値観、思い込みが、さもありなんの顔をして混じることはないだろうか。作品が成立した時代において解釈しようと挑戦し続けることと、現代において相対化しつつ鑑賞することのいずれをも許容するおおきな器量を持っているのが、古典であると思う。わかりやすさを追求するあまり、限定的な意識をして本来の含意を失うことがないようにしたいものである。

妹尾先生はかつて『竹取物語』の主題と方法について論じられた際、「幼き人」という語に注目され、「世俗的利益に妄執する有象無象でもなく、また超俗・永遠の解脱を求める悟りすました聖人でもない『幼き人』こそ、このうえなく魅力ある人間なのだ、作者は竹取翁の姿を描くことによって読者に訴えたかったのであろう。」と述べられた。人間存在を描く本質こそが文学作品『竹取物語』の要である。竹から生まれた冒頭だけを読んで「かぐや姫」のお話の世界にひきとめられるのは、もったいない。

注

(1) 角川書店編。なお本書の原文は、室伏信助訳注『新版 竹取物語 現代語訳付き』(角川ソフィア文庫 2001)に拠る。拙稿は、この解説批判が本意ではない。

(2) 『竹取物語本文集成』(王朝物語史研究会 勉誠出版 2008)により伝本十五種の比較が容易になった。A部分は、漢字仮名の違いを除くと、「かのたてまつれるふしのくすりのつぼそへて」(新井本)、「かの奉る葉にまた坪ぐして」(蓬左本)、「かの奉る不死のくすりに文壺具して」(3本)、という状況である。B部分の異同はほぼなく、御文一文(1本・ナシ)(1本、壺一壺を(1本)、燃やすべき由もやすべきと(2本)、燃やすべき由仰せ給ふもやす(1本)である。

(3) 出典注釈書は著者と出版年で簡略に示した。いずれも拙稿四頁に正式書名を記す。上坂 1989 『竹取物語全評釈 本文評釈篇』(右文書院)は通行本系の武藤本を用いるため入れたが、上坂 1978 『学術文庫』と上原 2012

は古本系本文を底本とするため入れていない。

- (4) 益田勝美「フィクションの出現―竹取物語」。1967 初出。『益田勝美の仕事2』(ちくま学芸文庫 2006) 所収。

- (5) 横井孝『竹取物語』の風景―富士の煙』『源氏物語の風景』(武蔵野書院 2013) 所収。千々和到『誓約の場』の再発見―中世民衆意識の一段面』(『日本歴史』第422号 1983)。

- (6) 三谷邦明『物語文学の言説』(有精堂 1992)・小嶋菜温子『かぐや姫幻想 皇権と禁忌』(森話社 1995) など。

- (7) 上原作和「帝の求婚とかぐや姫の昇天」。久保堅一『竹取物語』の仏教・神仙思想―も仏教・神仙思想の融合・混交を指摘する。ともに『竹取物語の新世界』(武蔵野書院 2015) 所収。

- (8) 片桐洋一『新全集』掲載参考資料より引用。片桐『中世古今集注解題』参照。

- (9) 上原作和・安藤徹・外山敦子編『かぐや姫と絵巻の世界 一冊で読む竹取物語訳注付』(武蔵野書院 2012)。

- (10) 室城秀之『前期物語と和歌―竹取物語からうつほ物語へ』『源氏物語と和歌を学ぶ人のために』(世界思想社 2007) 所収。

- (11) 鈴木日出男『古代和歌史論』(東京大学出版会 1990) など。
- (12) 齊藤みか『竹取物語』から「かぐや姫」へ―物語の誕生と継承』(東京堂出版 2020)。

- (13) 河添房江『源氏物語表現史 喩と王権の位相』(翰林書房 1998)。

- (14) 天野紀代子「幻術士から「幻」へ」(『日本文学誌要』第76号 2007)。
- (15) 勝亦志織『源氏物語』『幻』巻論』(『学習院大学人文科学論集』15号 2006)。

- (16) 注12に詳しい。

- (17) 宮川久美「小学校・中学校古典教材としての『竹取物語』についての考察」

(『奈良佐保短期大学研究紀要』特別号 88)。萩野敦子「愛」なき『竹取物語』は国語科教材に相応しいか―教科書教材と絵本「かぐやひめ」の現在から―(『言語文化論叢』16・17号 2020) など。

(18) 妹尾好信「幼き人」竹取翁礼讃の書―『竹取物語』の主題と方法―『竹取物語の視界』(新典社 1998) 所収。

―あんどろ・ゆりこ、大分大学教育学部・准教授―